

次号予告

特集 精神神経症と理学療法・作業療法

精神神経症の発症原因,

発症率, 型, 治療について…………… 東海大・精神科 佐藤 五十男

精神神経症と身体的合併症について…………… 国立衛生研究所 池田 由子

精神神経症の症例…………… 福岡大・精神科 石谷 直子

〃…………… 北海道庁 鈴木 明子

〃…………… 東大・リハ部 前田 哲男

〃…………… 南小倉病院 佐々木 直美

〃…………… 犀潟療養所付属リハ学院 金子 翼

精神神経症と作業療法…………… 九州大・心療内科 内村 静子

とびら…………… 府中リハ学校 高橋 正明

講座 失行症, 失認症Ⅳ…………… 都老人研 鎌倉 矩子

てんかんとリハビリテーション

2. てんかん児(者)の心理・精神的側面…………… 弘前大 福島 裕

プログレス…………… 川崎リハ学院 水野 祥太郎

日本女子大 小島 蓉子

編集後記

前号と本号の2回にわたる「ファシリテーション・テクニック」の特集を読んで、やはりわが国でのこの分野の経験や研究は非常に進んで来ているな、との感を深くした。特集の企画にあずかった者として大変嬉しいことである。

本号では脳性麻痺に対するファシリテーション・テクニックについて、龜山氏による諸種のアプローチの批判的概説、富、中島、紀伊、山田各氏のそれぞれの体験に基づいた思索、それに梶浦、佐竹、児玉、河村、福田の各氏にそれぞれの立場からの感想を書いていただいた。いずれもよく考えられたもので、立場の違いは依然として歴然としているものの、いずれの技法も実践の中で深められ、わが国の土地に根づいたものになって来ていることが感じられた。種々の技法の統合は理論だけではなく、結局は臨床の実際の中から生れるべきものであり、それには長い年月が必要であろうが、現在多くの人の努力で将来の統合に向う基礎作りが静かに進行しているように思

われる。

リハビリテーション医学会を機会に来日した Milani Comparetti は、各地で一連の講演をし、胎児期からの発達のダイナミックな見方と地域社会中心のスクリーニングとリハビリテーションのあり方を強調した。治療技法については個々の技法にとらわれることを批判し、個々の小児の現在の運動発達のダイナミックスをとらえることが先決で、それがありさえすれば治療の方向はおのずと見い出せるとした。この点はやや具体性を欠き、物足りなかったが、彼の運動発達のとらえ方は示唆に富むものであり、脳性麻痺の治療を考える上でも学ぶべき所が非常に多いと考えられる。

本号から「てんかんとリハビリテーション」の講座のはじまった。脳性麻痺をはじめとする小児のリハビリテーションにあたって必須の知識を、具体的に教えていただける内容で非常に有益である。なお「プログレス」の岡崎氏のリウマチ、池田氏の小児精神医学のシリーズは短い中にも豊富な内容で、教えられるところ多かった。共に心から感謝したい。(上田 敏)

<編集顧問>

天 児 民 和
九州労災病院長

五 味 重 春
筑波大学心身障害学系教授

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院名誉院長

津 山 直 一
東京大学教授・整形外科

水 野 祥太郎
川崎リハビリ学院長
(五十音順、以下同じ)

<編集委員>

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
わらび診療所

大喜多 潤
兵庫県リハビリセンター

鈴木 明子
府中リハビリ専門学校

寺 山 久美子
都心障センター

奈 良 勲
金沢大学医療技術短大

福 屋 靖 子
筑波大学

松 村 秩
都養育院リハビリ部

<編集同人>

大 橋 博

大 丸 幸

金 子 翼

鎌倉 矩子

紀 伊 克 昌

駒 沢 治 夫

佐 藤 章

佐 藤 馨

嶋 田 智 明

高 橋 正 明

武 富 由 雄

谷 岡 淳

富 岡 詔 子

中 屋 久 長

藤 沢 しげ子

松 本 妙 子

丸 谷 隆 明

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

和 才 嘉 昭

(担当 細田・西塚)